

【発表 NO.5】

実践発表

南米パラグアイのエンカルナシオン日本語学校で学ぶ中学生の学びと成長

—「日本語で学ぶ」ことを重視した授業実践より—

五嶋 友香（元・JICA 海外協力隊）

1. 実践の場

筆者は2024年2月から2026年2月までJICA海外協力隊の日本語教育隊員として南米パラグアイにあるエンカルナシオン日本語学校で活動した。エンカルナシオン日本語学校には、主に日系にルーツをもつ子どもたちが通う幼稚園部、小学部、中学部があり、2025年12月1日時点の在籍園児児童生徒は35名である。子どもたちは「学校」という場で、日本語や日本文化を体験し、学んでいる。筆者は2年間、中学部クラスを担当した。授業は毎週土曜日の8時から12時である。クラスには中学1年から中学3年までの生徒が在籍し、2024年度は6名、2025年度は7名で全員日系にルーツをもっていた。クラスの特徴として、日本語能力がさまざまであったことがあげられる。日本語能力試験のN1を取得した生徒もいれば、N5を目指している生徒もいた。授業で使用する教科書や学習項目は特に決まったものがなく、授業構成や内容は担任教師が自由に決めることができた。

2. 実践の詳細

「学校」という場を考慮すると、同級生が同じ授業内容を学び合い、ともに成長していくことが大切であるが、「日本語教育の現場」という観点では生徒の日本語能力を考慮することも、同様に大切である。これを踏まえて筆者は「日本語を学ぶ」よりも「日本語で学ぶ」ことに重点をおいた「テーマ学習」を授業の一部、全4時間のうち約半分の2時間で実践することにした。

テーマ学習では「自分の日本語力を最大限に活かし、自分の考えを日本語で表現することができる」を目標とした。テーマは2024年と2025年は「移住学習」、2025年は「自分史学習」と、日本文化や時事問題などを扱った。移住学習は、生徒ひとりひとりが日系社会の歩みと自分のルーツについて学ぶ内容で、自分史学習は生徒がこれまでの自分をふりかえり、自分自身を見つめ直す内容である。移住学習と自分史学習は教師が毎回小テーマを決め、それぞれ17回と6回実施した。移住学習の小テーマは「移住の歴史を知ろう」や「日系社会を支えた農業」などで、自分史学習の小テーマは「自分の大切なもの」や「自分のことばを考えよう」などであった。日本文化や時事問題は、各回で完結するようにモジュール形式で6回実施した。内容は、日本の小学校や制服文化、環境問題、食品ロス、フェイクニュースなどでNHKの「こどもニュース」から内容を選ぶこともあった。

各授業では毎回筆者が作成したA4のワークシート両面1枚から2枚を使用し、自分の考えを書く問いを3つから5つほど設けた。授業構成と流れは各テーマで変化をつけていたが、多くの場合、1)アイスブレイキングでテーマ導入、2)関連するビデオの視聴、3)問いに答える、4)ふりかえりであった。また、授業では、個人作業だけでなくペアやグループ活動の機会を設けて、生徒たちがお互いにサポートしながらともに学び合う時間を大切にした。

3. 実践の結果と課題

テーマ学習の授業を重ねていくごとに目標達成に近づき、成長が見られる生徒が増えていった。とりわけ成長が大きかった生徒Aと生徒Bについて述べる。

彼らに共通していたのは、2024年のワークシートには彼らが得意なスペイン語で自分の考えを表現することもあったが、2025年はほとんどスペイン語に頼らず、積極的に漢字を含む日本語で書き、長い文で表現できるようになったということである。テーマ学習は「日本語を学ぶ」よりも「日本語で学ぶ」ことに重点を置いた授業であるため、日本語で自分の考えをすべて100%表現することよりも、生徒ひとりひとりがテーマ学習を通して思ったことや考えたことをより大切にしたいと考えた。そのため、生徒の状況やレベルに応じて、日本語で表現するのが難しい場合は、スペイン語で表現することも可としていた。生徒Aと生徒Bは、スペイン語の使用を可とする授業のなかでスペイン語に依存しすぎず、少しずつ彼らのペースで、自分の持っている日本語力を発揮して自分の言いたいことを日本語で表現できるようになったという変化は大きな成長である。さらに、漢字を使っていたことや、短い文ではなく長い文で書いていたことから、積極的に日本語を使いたいという彼らの意欲的な姿勢がうかがえる。

<生徒Aの例>

Q: 感想を書きましょう。

A: もったいない食べものがいっぱいあるのは悲しいだと思います。虫を食べることはちょっと気持ち悪いです。でももったいない食べ物でほかのことをやったら、もっといいなせかいになるかも。

【テーマ：食品ロス ワークシートより抜粋】

<生徒Bの例>

Q: 昆虫食のいいこと、悪いことは、何だと思いますか。

A: 生き残るために役立つ。何を食べ、何を食べてはいけないかを知らなければ、どんな病気にもかかる可能性があります。

【テーマ：食品ロス ワークシートより抜粋】

小林（2022）によれば、JSL生徒の「ことばの実態」のひとつには、書き手の思考や考えに関する「自己表現」に関わる内容があると述べている。上記の生徒Aと生徒Bの例を見ると、授業で使用したワークシートに彼らの思考や考えに関する「自己表現」があることが読み取れる。このことから、生徒Aと生徒Bがテーマに関する自分の考えを、漢字を含んだ長い日本語の文で表現できたことは、ひとつの自己表現にもなったとも考えられる。

一方で、目標達成に近づけなかった生徒がいたのも事実である。そこには、日本語をまちがえてしまうことへの恥じらいの気持ちがあるのではないかと推察する。生徒ひとりひとりによって性格が異なるのと同様、習得中の言語を積極的に使用する姿勢に違いが見られるのも当然である。今後は、授業の進め方や内容を再度検討し、生徒全員が自分の持っている日本語力を信じて自己表現ができるような教室活動を計画していき、生徒ひとりひとりにより向き合えるような工夫をしていきたい。今回の実践を通して、生徒の日本語表現の幅が広がり成長が見られたという成果から「日本語で学ぶ」テーマ学習の可能性を見出したことに実践の意味があったと考える。

【引用文献】

小林美希（2022）「JSL 高校生が第二言語である日本語で「書く」ことにはどのような意味があるか—子どもの「ことばの実態」から考える」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』13、移動する子どもフォーラム、pp. 38-71

中山寛子（2010）「パラグアイの日系人と日本語に関する一考察—『国語としての日本語教育』の意味するもの—」『大学院紀要 = Bulletin of graduate studies』64、法政大学大学院、pp. 31-57